[書　評]

江原　裕美編

『内発的発展と教育――人間主体の社会変革とNGOの地平――』

黒田　則博
(広島大学)

本著は、同じ編者による『開発と教育―国際教育と子どもたちの未来―』(2001年）の姉妹編である。このように立て続けに、発展途上国の教育開発とそれへの国際協力に関する本格的な論文集が出版されることは、特に1990年の「万人のための教育世界会議」以降の、この分野への関心の高まりと、この分野における研究者や実践者の増加を反映しているといってよかろう。

前著が、途上国のいわば公教育システムに焦点を置きその普及の実情を報告するとともに、それに対する多国間・二国間の教育協力の現状と課題を明らかにしようとしたのに対し、本著ではもっとミクロな観点から、地域社会や個々の子どもに目を向けつつ、そこを基点として生れてくる発展や教育開発に対する新たな概念やアプローチを探ろうと試みている。その探究は、理論的な論考によるというよりは、「北」においても「南」においても様々に実践されている具体的な活動、特にNGOによる活動を踏まえて行われている。

本著は、編者自身による「序章　二一世紀における教育の発展―人間開放を目指して」のほか、全部で3部構成となっている。序章では、近年の「開発」に関する思潮を簡潔にレヴューし、また「南」における教育の実情を踏まえた上で、「南」はこれまで教育について絶えず「北」の「客体」であり続けており、「南」自身が真に「主体」となる道として「内発的発展」を追求すべきではないかと提起し、本書の意義を明らかにしている。さらにその上で、NGOの活動を「内発的発展」を進めるための一つの可能性として位置づけ、なぜNGOを取り上げるのかについての理由を示している。

第Ⅰ部は「世界の教育現実」と題されているが、これは途上国の教育の現況を統計等により概観したものではない。むしろ本著のアプローチがまさにそうであるように、いくつかの途上国の地域社会における活動に焦点を当てて、どのような内発的なアプローチが生れつつあるのかを事例的に示そうとしたものである。「第一章　アジアの人々と教育(1)―アフガニスタンからの報告」(川崎けい子)、「第二章　アジアの人々と教育(2)―東北タイ(イーサン)からの報告」(楠原彰)、「第三章　アフリカの人々と教育―ガーナにおける国際NGOの動向」(横関祐見子)、「第四章　ラテンアメリカの人々と教育―エクアドルにおける先住民教育の軌跡」(編者)、といずれもこれらの活動を長く深くしかも優しい眼差しで見つめてきた人たちの報告だけに、ヴィヴィッドに現地の様子が伝わってくる。

第Ⅱ部が、内発的な教育発展における

NGOの可能性と課題を探ろうと試みた、「『民』主体の教育への協力—NGO活動を中心として」である。ここでも直接にNGOの活動に深い経験のある筆者の手になる報告や論文であるだけに、その問題提起には鋭いものがある。「第一章　アメリカNGOの教育協力」(上岡直子、ジョシュア・ムスキン)、「第二章　ヨーロッパNGOの教育協力」(ティエリ・ヴェルヘルスト、フランソワ・ミリス)、「第三章　日本のNGOの教育協力」(三宅隆史)、「第四章　日本における『開発教育』の展開」(湯本浩之)が収録されている。

人権、ジェンダーなど、内発的発展と教育に関わるいわば横断的なテーマを扱ったのが、「第Ⅲ部　地球に生きる—人間のための教育を求めて」である。「第一章　権利と行動の主体としての子ども—インドの子どもたちとNGOの取り組み」(甲斐田万智子、中山実生)、「第二章『ジェンダーと開発(GDA)』から見た教育」(織田由紀子)、「第三章　ラテンアメリカにおける民衆教育の歴史と思想」(モアシル・ガドッチ)、「第四章　民主的教育の理念と実践—個性と社会性を育成する教育の模索」(吉良直)、「第五章　新しい教育開発の可能性」(今井重孝)という論文が並び、途上国の問題に限ることなく、教育に関わるより普遍的で根源的な問題にまで論考が広がっている。

なお本著にはこのほか、トピックと称する5編の短い、内発的発展に向けた地域での活動報告が掲載されている。

途上国における教育開発やそのための国際教育協力に関しては、ようやく近年になって、何冊かの教科書が出版されたり、広島大学教育開発国際協力研究センターが国際教育協力に特化した論集を刊行するようになったりしているが、前編や本編のように、この分野において本格的な著作物が出版されたことは、今後この分野の活動を周知しまた活発な議論を行っていく上で意義深いことである。しかも研究者のみではなく、多岐にわたる分野の人たちがそれぞれの経験を踏まえ、論文や報告の形で発信していることは従来の学術書とはやや性格を異にするものであろう。それゆえ逆に、物足りないと思われる研究者もいるかもしれない。しかしこの分野での研究は、本質的に実践的・開発的な性格がついて回るものであり、その提示の仕方も自ずと異なってくるであろう。

さて、本書の中心的なテーマである内発的発展である。確かに個々の事例からは、内発的発展という言葉こそ使われていないものの、自分の足で立って進もうとする勢いがひしひしと伝わってくる。それについては、女性によるNGO、アフガニスタン女性革命協会(RAWA)にみられる、イスラム社会において女性が自立して生きていこうとする決意と行動であったり、タイのある農村における「売るための農業」(市場経済のための農業)ではなく「生きるための農業」の選択であったり、本書に収められている事例には枚挙に暇がない。しかしそれら様々な実践を踏まえ、本書として内発的発展についてどのようなメッセージを送ろうとしているのか、必ずしも明確でない点もある。おそらくそれは、本書のような多数の著者による著作の宿命であるのかも

しれないし、そもそも内発的発展について一般的に語るよりは、個々の実践に則してこそ内発的発展というものが理解できるとの考えによるのかもしれない。そうだとすれば、ないものねだりということになろうか。

もし3部作をお考えならば、ぜひ「南」の人たち自身に教育開発や教育協力について語ってもらいたい。「北」の人たちだけが「南」の人のために内発的発展について議論しているというのもおかしな構図である。これこそ内発的発展の対極にあるものである。

いずれにしても、本書は内発的発展に向けた興味深い実践の極めて良質な報告集であり、またそれに関わる教育の普遍的な課題に関する論集でもある。読者はどこからでも読み始めることができ、それぞれに十分に読み応えがある。**(A5判、478頁、3,800円＋税、新評論、2003年)**